

# 歌舞伎町における女性支援とサードプレイスの役割

## ——支援者の語りにみる実践と葛藤——

上間あや華

東京都新宿区にある歌舞伎町は、経済的な活気の裏で、日本の構造的な格差や脆弱性が顕在化する場所である。ジェンダー格差による女性の困窮や、居場所を失った「トー横キッズ」など、深刻な孤立が浮き彫りになっている。若者たちの多くは公的機関への不信感や自責の念から自ら助けを求めにくい状況にあり、民間団体がアウトリーチなどの活動を通じて「居場所」を提供し、公的支援への橋渡しを担っている。

本論文では、歌舞伎町を対象に若年女性が直面する複合的な困難の構造を解明し、民間支援団体による「サードプレイス」構築の意義を明らかにすることを目的とする。歴史的背景やジェンダー格差による女性の経済的脆弱性を元に、家庭や学校から排除された若者がホストクラブなどの性的搾取構造に誘引される実態を分析した。研究手法としては、2024年施行の女性支援新法などの公的支援を概観した上で、実際に現場で活動しているNPOに所属する支援者へのインタビュー調査を実施し、その実践知を抽出した。分析の結果、支援現場ではホストクラブなどの魅力に対抗すべく、あえて空間に「キラキラ感」を演出し、能動的なアウトリーチを行うといった、歌舞伎町の特異性に適合した「戦略的实践」が展開されていることが明らかになった。支援者は法制度の非対称性や、加害者の認知の歪みという巨大な壁に直面し、深い葛藤を抱えながらも、当事者の主体性を尊重する高度な倫理観と知見を培っている。結論として、民間支援は公的支援の限界を補完し、新たな居場所の可能性を示していると言える。今後の課題として、支援者の献身に依存する現状を改め、悪質な売り掛け金の規制や買春側への罰則強化といった法整備、ならびに若者へのメディアリテラシー教育を社会全体で推進していくことが不可欠である。